

小泉信三賞

永遠的な「愛」は捉えられるか？

入江太一
（神奈川県／慶應義塾高等学校三年）

はじめに

古代から現代に至るまで、哲学者や数学者によるところの「無限」に関する議論は数知れず、侃々諤々たる意見のぶつかり合いとその応酬ときたら、まさしく百家争鳴、

論論風発といった観で、私がこの場を借りて言及せざとも論を俟たない。アリストテ

レスに始まり、カント、ヘーゲル、カントール、ゲーデル、そして、ウィトゲンシュタインと、紀元前四世紀から紀元後二十世紀、そして今に至る二十一世紀へと、綿々と繰り返し思考され続けてきたこの問題は、哲学上最も大きな問題の一つといえるだろう。しかしながらこの問題は一向に汲み尽くされることがないばかりか、謎や矛

こそが現代社会に蔓延する、寂寥や怠惰といった、なんとなく先の見え切った抜けた心地の禍根、元凶、諸悪の根源であると断定して良いとすら思っている。また「無限」と人間とのその両者の関係性によって、一方我々の人生は豊かなもあり、はたまた絶望的な閉塞状態に追い込まれることもある。ような「無限」とはそうした我々自身の「生の意味」を価値づける、その最たる一要因であると考えている。

二十世紀を代表する精神科医ユングは「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程」（注1）を「自己表現」と呼び、これを人生の究極的目的と考えた。また同様に精神科医のアドラーは「すべての人を動機づけ、われわれがわれわれの文化へなすあらゆる貢献の源泉は、優越性の追求である。人間の生活の全体は、この活動の太い線に沿って、即ち、下から上へ、マイナスからプラスへ、敗北から勝利へと進行する。」（注2）とした。

こうした、人間精神の全体性と調和への希求、そして自己をさらなる高みへと不斷に推し進めようとするニーチェ的な「力への意志」さながらの、本来的に人間にそな

わる無限や永遠への郷愁は、滅びゆくしかない人間の痛切な、そして涙ぐましい生への固執と死への怯懦の、金切り声にも似た嗚咽の明々たる顕現なのである。だからこそ例えは我々の常なる平静な精神が脅かされるとき、それは我らの自我の統合と実存、そしてその確たる存在意義が、無限なるものひいては永遠なるものに切迫されているからに他ならない。

こうした誰しもに付きまとつて離れない強迫観念、人生の途方もない愚にもつかない様、ニヒリズム、こうした一切の無気力と、我々はこの人生を通して和解せねばならないのだが、こうした和解は、人生の中の有限と無限の邂逅、その僅かな転瞬に達成されるに違いない。だからこそ無限に纏わる問題とは、自己の人生に対する問題でもあるわけだ。そしてこの我々の生命の尊厳を脅かしかねない圧倒的な「不条理」たる「無限」と、如何にすれば我々は和解し共立しあえるか、本論文のテーマはここにある。

〔無限〕と〔愛〕について

かつてギリシアの偉大な哲学者たるプラトンは、「饗宴」のなかで次のように述べた。「エロス（愛）とは、まず第一に、何かに

対して、次には現に欠乏を感じているものに対して、存在する」（注3）そして「愛とは善きものの永久の所有へ向けられたものは善きものの永久の所有へ向けられたもの」（注4）である。そういう意味で、彼における「愛」とは、副次的な方法論に過ぎず、「イデア」への、つまりは「無限」への郷愁である。だからこそ「有限」なる人間は、愛する者との間に子を作り、いざれ滅びゆく自己の悲しき運命を、未来の子孫に託すのである。子孫とはすなわち、自己の無限的な反映に他ならないから。

またドイツの思想家フロムは人間の根源的な欲望は「合一」への欲求であり、「誰かを愛するというのはたんなる激しい感情ではない」（注4）「すなわち、自分という存在の本質から愛し、相手の本質と関わりあうということ」（注5）そして「融合において、私はあなたを知り、私自身を知り、すべての人間を知る。」（注6）とした。彼の言うところの意味においては、「愛」とはまさしく、我々人間同士の間に横たわる本質的で絶対的な壁をぶちこわし、「愛」というその「行為」の実践の中で、その対象を通じて人類全体と、そして世界と、さらには人生との「合一」を達成することにあるというわけだ。

以上のことからも、「無限」なるもの、そして「永遠」なるもの（以降、本論文において「無限」と「永遠」は同義とする）の本質的な在り方は「愛」によって捉えられると帰結しえる。なぜなら「愛」とは「無限」なるものを目的として、それに向かつてこうとする一つの欲動であるといえるわけで、だからこそ「愛」を捕捉し得れば、その「愛」自身が我々を「無限」なるものへと導き、自ずと案内人の役を買って出てくれるだろうからである。

そして本論文の要点と今後の展開の筋道とがここに顯然とされる。というのも、二十世紀の哲学者ウイトゲンシュタインに倣えば、我々の思考は「論理空間」内においてなされ、その「論理空間」は「対象」に依存し、「対象」は「事実」から切り出されれる。よって我々は、「論理空間」外の「無限」については思考しえない。ひとえに「無限」とは「真理閏数」の「操作」の繰り返しにすぎないからである。つまり「語りえぬものについては、沈黙せねばならない。」（注7）のである。だからこそ我々は、ウイットゲンシュタインが語りえない「思考」それ 자체を思考する際に、「境界は言語においてのみ引かれうる。」（注8）として、

その代理物である「言語」を思考したように、語りえない「無限」の考察は、その代理物である「愛」の考察の方に席を明け渡し、その実権を委ねたいと思う。ここにおいて「無限」についての論説は「愛」についての論説に取って代わるのである。

「愛」に関する考察は取り扱う内容の抽象的たる故、非常にアレゴリーな、また婉曲で核心を避けた遲疑逡巡な物言いとなるがご容赦頂きたい。というのも「愛」の純然たる概念を抽出し捉える上では、直接的な論理やアフォリズムは、むしろその形象のナイーブな魅力を破壊することになるからである。さながら、曉天の甘美でしのびやかな夢幻も、こちらの方でいきり立ち、掴み取ろうと躍起になればなるほど、その陶酔と微醺は身をくねらして雲散霧消し、後には残夢の苦い未練とその残像をしか掴みえないようなものである。また太陽の照り付ける反映で、玲瓏と透き通つた水面の遠景に、霞み漂うほのかな漁船の悲哀とその美しさも、ウォータージェット推進システムを搭載した水上バイクによって高速度で詰め寄つて見ては、近代的なグロテスクをしか見出しえないようなものである。我々はただそのニュアンスをのみ、遠巻き

に蜃氣楼の如く眺めやることが許されていいるだけだからである。

現代社会における「愛」

「愛」について考えるうえで、まずは現代社会の中におけるその在り様を考えていきたい。戦後、世界最貧困にまで落ち込んだ日本の経済は、朝鮮戦争におけるアメリカの物資の不足とその補償の要請を受け、一転好景気となり完全にその復興を成し遂げた。それと同時に文化の面においても、従来の封建的な日本の家長的家制度は崩れ去り、結婚も「家」と「家」との間で取り行われる儀式的な厳粛さは、アメリカナイズしたロマンティックラブに取つて代わられることとなつた。しかし三島はこの事実を「アメリカのような恋愛技術では、恋は打ちあけ、要求し、獲得するものである。恋愛のエネルギーはけつして内にたわめられることがなく、外へ外へと向かつて発散する。しかし恋愛のボルテージは、発散したとたんに減滅されるという逆説的な構造をもつてゐる」（注9）と指摘し、戦後社会における「愛」の不完全な未成熟さを指摘した。彼の提言通り、今や我が国における、いいや日本のみならず世界全体が、

「愛」の本源的な特質とその在り方を見失つているようである。現代の我々にとつて「愛」とは、永遠を捉えるための副次的な、目的としての感情ではなくなり（前章で指摘したように「愛」とは、より高次のものへと働く目的を持つた欲動のようなものである）感情 자체が最終的な終着点であり、一つの到達点と化してしまつて。また「愛」はその性質上、現実の不可逆的な時間の流れとは相対立するもので、現実の中に置くにはあまりにも儂く、薄命な存在である。だからこそ人間は「愛」それ自身を愛してしまつては、そのあまりの寄る辺無さに絶望し、自己の存在意義を見失つてしまつことになるのだろう。こうした我々の「愛」に対する投げやりな諦めが、「愛」までもを資本主義的な価値観の下に定置させ、「愛」を「商品」のような物質的価値基準でしか捉えられなくなってしまう。こうした感情を感情でなくすような、いわば人間の「自己疎外」的な働きは、我々を我々自身からも孤独にさせていき、私達現代人は虚脱状態に陥つた抜け殻のよくな「靈となつてしまつ。しかしこうした「愛」の本源的な在り方を完全に見失つてしまつ盲目的な孤独は、今に始まつたものではない。「寂

しさに宿を立ち出でて眺むればいづこも同じ秋の夕暮れ」という、平安時代に良運法師によって詠われた短歌があるが、この詩もまた真実的な「愛」を求める心と、つましい実生活とでは決して相いれないという、メランコリーな心情を抒情的に詠んだ詩であろう。つまりこうした事情からも窺い知れるように、我々はいつの時代も変わらず真実的な「愛」を希求し続ける一方で、現実社会において、事実それを獲得し得た人物は容易に見出しえないという事である。さらには、我々現代人の多くはそもそも「愛」というものが如何様なものなのか、というその実態をすら判然と捕捉しえていないのである。「愛」の真実的な概形をどうえうるためにも我々は、雑多な観念の渾濁を受けずにその純然たる「愛」の姿を保全し得ているであろう領域にまで、その考察対象を拡大せねばならないのである。

「愛」と「芸術」

やわい花々はほろ酔い加減の甘い香氣を振り巻き、その纖細な花弁をなよやかに、そしてしとやかに開いて、日夜その理解者たるミツバチとの逢瀬を待ちわびてゐる。ただそれを近代的で現代的な夾雜物の、粗

鬆なコンクリートが彼らを埋め立てその麗しい形象を遮つてはいるものの、しかし未だその芳香は闇(しきみ)の向こう側から微かにではあるが、ほのかな残り香を漂わせ、研ぎ澄まされたデリケートな嗅覚によつてはその存在を予感し得るのである。そ

の嗅覚たる方法が「芸術」である。なぜなら「芸術」とは、真実的な「愛」を捉えようとする人類の不斷の試みに他ならないから。そして私は次に「芸術」が真実なる「愛」を捉えようとするうえで、いかように腐心しております、またそれがいかに困難な事柄であるか、その両者の関係性に注目すること

で、「愛」の概形を考へてみたいと思う。
真実なるものの追求に全人生を費やした作家がいた。三島由紀夫である。彼の作品の中に『詩を書く少年』という短編がある。芸術に取りつかれた十五の少年を主人公とし、彼の尊敬していた博覧強記、才氣煥発たる文芸部の先輩学生が人妻に恋をする。すると彼の今までのどこかアンニユイな美しさや高尚さは減失され、そこには恋に悩む一青年の陳腐で愚劣な姿をしか見出しえなくなり、少年は愕然とする。

ここには一個の痛烈な逆説が存する。どういとも、現実をきらびやかなものとする主人公は、この前かららしい「真実」なのであり、それと同時に現実的な「真実」は壯麗な「虚構」の前では、その真実の座を譲り渡さねばならなかつたのである。そういう意味で彼の作品は、芸術家としての芸術と事実との対峙、そして芸術と人生との対峙をテーマとした

はずの芸術が、それを材料とするところの鮮明な現実体験を前にして、その壮麗な装身具はものの見事に瓦解していくナンセンスと化したからである。芸術と現実との間の離れがたい背理があるのである。

主人公はここで、彼の前には虚構でしかなかつたやがてくる現実の、凄惨で、無慈悲で、無感動な堅牢さを予感するのである。

こうしたテーマは三島作品の中で終生にわたつて主題として繰り返される。平岡公威、つまり三島由紀夫は、現実の中では驚くほどに不能であった。だからこそ逆に彼自身の真実性への欲求、芸術的な天分は現実からの腐蝕を免れ、それゆえ彼はその生涯の中で現実を生きることに耐えなかつたのである。彼の作家としての偉大性はここにある。だからこそ『仮面の告白』のなかで主張されるように、彼は生まれたときの光景を「眞実」に目撃していたのである。彼にとって「虚構」は「眞実」よりも余程確かな「眞実」なのであり、それと同時に現実的な「眞実」は壯麗な「虚構」の前では、その真実の座を譲り渡さねばならなかつたのである。そういう意味で彼の作品は、芸術家としての芸術と事実との対峙、そして芸術と人生との対峙をテーマとした

ところで、非常にトーマス・マン的といえ

よう。彼において最も真実らしい「愛」を見つけるには、それは「虚構」の中にしかりえず、そこには一切の現実的な生活があつてはならないのである。『シンデレラ』は王子と結ばれたその刹那に大団円を迎え、最も新鮮な幸福の絶頂たるところで物語は打ち止められたからこそ、彼女は「眞実」に幸福たりえたのである。これは「虚構」だからこそ成し得た特権的な精髄であつて、もしも子供のオムツをせつせと取り換えていたるデブ・デブと太つたシンデレラと、我が子を顧みずソファーに寝ころびボテチを食い散らかす王子との、その後の結婚生活まで見せられようものなら、こちらとしてはたまつたものではない。そして現実の中における「眞実」の「愛」の完成を反口マンズム的精神で試みた作品が『午後の曳航』である。逞しい肉体の船乗りと、夫を亡くし未亡人となつていた母親との抱擁を目撃した主人公は、その光景に芸術的な恍惚を覚える。その後、船乗りは母と結婚するも、父となつた船乗りの姿は、主人公にとっての彼の英雄的な尊厳と権威とを失墜させるものであった。主人公は船乗りを英雄たらしめ続けるために、彼の殺害を

計画するのであつた。

また寺山修司の詩に『海のアドリブ』というものがある。自分の描いた「海の絵」に投身自殺することを切望している画家が、生活苦の果てに、事実として本物の海に本当に投身自殺をしてしまう。しかし飛び込んだ海に飛沫は上がりらず、また音もなくそれは遂行された。そして遺されたアトリエの「海の絵」は、大きな水音と共に、白い飛沫をあげたという。この作品もまた、芸術と人生との強烈な背理と対立を描いている。彼は「虚構」の中に「眞実」を求めた。しかしそれはあくまでも「虚構」に過ぎず、さしせまる現実の脅威を前にしては成すべもない。やがて彼自身の現実である人生の中に画家は「眞実」を求める決意をし、それゆえ彼は「死」することによって初めて、人生と芸術との間の永遠的な対立と相克に一点の融和の可能性を見つけたのである。

こうした観点で考えると石原慎太郎の『太陽の季節』は、決して規制倫理への反逆とか、はたまた「ドライ」といった言葉で表されるようなものではなく、狂おしいまでの純然たる芸術的な欲求（この作品で希求される芸術性は何も初めからジユネやボーデュールのような退廃的なものでは

ない。それは現実の切迫な圧力のために捻じ曲がつた形で露呈されただけで、その核心は非常に生真面目で純粋なものである）と、高度成長期前夜の日本人の堕落した現実社会の欲望との狭間で喘ぐ、涙ぐましい青年の一物語であるといえよう。そしてこの物語もまた、ヒロインの「英子」の悲劇的な「死」によつてカタストロフを迎える。

これらの「眞実」と「虚構」の対立、つまり「眞実」と「芸術」との対立を色濃く描いた作品には、「愛」と「死」との分かれがたい連関性が見受けられる。これは洋の東西を問わず、古今東西にわたつて様々なる物語の主題となり得ている。近松の『曾根崎心中』や三島の『春の雪』や『憂国』、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』、ゲーテの『ウェルテル』、マンの『ヴェニスに死す』、オペラにしてもワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』等があげられ、枚挙にいとまがない。

「エロティシズム」とは、死におけるまで生を称えること』（注10）だとバタイユが述べたように、エロティシズム（愛）とは人が「生」の中で「死」を疑似体験することであり、「生」においては絶対的に摑みえない「死」という存在の背理を「合」

させようとする試みに他ならない。これはいわば、自分自身の人生との和解、有限な人間の無限的な事物への到達の試みの一つの臨界点であるといえよう。そしてこの臨界点は眞実の「愛」の本質に他ならない。さいごに

そして私自身における、「生」と「死」との、そして「眞実」と「虚構」との、または「愛」と「現実」、「無限」と「有限」とのそうした一切の矛盾を「合」たらしめ、私に一つの人生に対する無根拠なまでの楽觀と希望を与えてくれるものが、私にとっては「海」と「太陽」とであった。私は心の根幹にどうしても拭い去りがたい不等感があり、行動の上でも言葉の上でも、私は未だ眞実というものが存しない。私の「生」は幼児のころより停滞し続けているようである。また私はどうしても平静に生きていくことが出来ず、私の行動や言葉の力みは、私を私自身の全てから離すとういう天邪鬼を試み、私は常に破滅的な立ち回りを演じる。こうした私の一切の「虚構」性は、寄生虫が寄主の栄養を奪いやがてはそれを死に至らしめるように、私の「眞実」を食いつくし、今や私は「空虚な虚構」

である。私にとって「虚構」はもはや「虚構」足りえず、また「眞実」にもなり得ない。私はもはや、何ものにもなり得ない。だが私にとって「海」と「太陽」だけは、私を私たらしめてくれた。一切を無感動な抱擁と蹂躪で被膜する「海」は私のあらゆる感情を根絶し、「太陽」の怠惰な活力は私に赫奕として照り付けその生命を賛美してくれた。彼らのうちでは私は輝ける一個の肉体たりえたし、全存在と調和した。

(注3、4) プラトン(久保勉訳)『饗宴』
岩波書店、一九五二年
(注4、5、6) エーリッヒ・フロム(鈴木晶訳)『愛するということ』紀伊國屋書店、一九九一年
(注7、8、11) ウィトゲンシュタイン(野矢茂樹訳)『論理哲学論考』岩波書店、二〇〇三年

(注9) 三島由紀夫『葉隠入門』新潮社、一九八三年
矢茂樹訳
(注10) バタイユ(酒井健訳)『エロティックスム』筑摩書房、二〇〇四年
シズム(堀口大學訳)『ランボー』新潮社、一九五一年

(注12) ランボー(堀口大學訳)『ランボー詩集』新潮社、一九五一年

〈参考文献〉
エーリッヒ・フロム著(鈴木晶訳)『愛すること』、紀伊國屋書店、一九九一年
三島由紀夫『小説家の休暇』、新潮社、一九六八年
三島由紀夫『行動学入門』、文芸春秋、一九八二年
三島由紀夫『行動学入門』、文芸春秋、一九七四年

野矢茂樹『論理哲学論考』を読む、筑摩
アルテ、二〇一〇年
(注1) 河合隼雄『ユング心理学入門』
岩波書店、二〇〇九年
(注2) アルフレッド・アドラー(岸見一郎訳)『人生の意味の心理学』上巻
アルテ、二〇一〇年

書房、二〇〇六年
ヴィトゲンシュタイン（野矢茂樹訳）『論理

哲学論考』 岩波書店、二〇〇三年
A・W・ムーア（石村多門訳）『無限 その

哲学と数学』、講談社、二〇一二年
フロイト（中山元訳）『幻想の未来／文化への不満』 光文社、二〇〇七年